

☆市民公開講座 | 第57回日本小児神経学会学術集会 (5月30日 帝国ホテル大阪)

<当日会場から配布されたレジメなどをもとにFBしたものをワード版に編集しました。 記: 中畑>

<http://www.c-linkage.co.jp/jscn57/lecture.html>

「医療的ケアを受けながら地域で生きる子どもを支えるには」も開会されましたよ。会場のイスは220席程用意されているとか。ほぼ満席になってきました。課題提起として「どうして在宅高度医療児が増加したか？」題して船戸さんがお話し。*配布資料より、…在宅移行し、在宅を継続するためには、最低限次のような三本柱が必要であると思われる、1) 医療の三本柱:(1) 重症児・者に対応可能な訪問看護師・訪問リハスタッフ、(2) 地域のかかりつけ医(訪問診察・往診も含む)、(3) 緊急時の受け入れ体制の確保、2) 福祉の三本柱:(1) レスパイトを含めたショートステイ・ディケア事業、(2) 医療的ケアに対応可能な居宅(訪問)介護事業、(3) 相談支援事業の充実、3) 教育の三本柱:(1) 学校での看護配置、(2) 教員の医療的ケア研修、(3) 移動中の医療的ケア体制の確保などである。これらの視点を踏まえ医療的ケアを受けながら地域で生きる子どもを支えるために、各医療・福祉・教育現場における現在の問題点と今後の地域における課題について一緒に考えることができれば幸いであると報告が。報告者は、①地域かかりつけ医の活動と課題: 春木常雄さん(東大阪生協病院小児科)、②小児訪問看護の現状と訪問看護の一事例: 下釜聡子さん(石井記念愛染園訪問看護ステーション、大阪府訪問看護ステーション協会)、③学校における医療的ケアの現状と今後の課題: 丹羽登さん(元文部科学省初等教育局特別支援教育課、現: 関西学院大学教育学部)、④障害者医療にかかわる医療者の育成の課題: 三浦清邦さん(名古屋大学大学院医学系研究科障害児(者)医療学寄附講座、現: 豊田市こども発達センター)、⑤親の立場から望むこと: 竹本由子さん(児童発達支援放課後等ディサービスはつかぜ)、それぞれ報告されます。各報告後にフロアから質問タイムもあります。参加者250名を超えていますよ。会を終えるにあたって: 高田さんから、*配布資料より、…私たち自身が住む地域に合った仕組みを考えていくことが必要である、小児の在宅医療には、(1) 子どもが持つ生命力、可能性の豊かさ、(2) 子どもを支える家族、(3) 学校と先生、(4) 熱い思いを抱く専門医療職、(5) 未利用の社会資源これらの利点を取り入れ、成人期をも視野に入れた”ライフステージを通じた支援”を行政機関と共に考えなくてはならない、このような難問に挑戦し続けることこそが、コミュニティを活性化させ、結果として、高齢者の医療をも包み込む”地域に根差した医療”を創り出すのだと思う、また阪神淡路大震災や東日本大震災での医療的ケアを必要とされている方々の教訓や課題なども日常的に生かしていくことも大事だとまとめ報告をされました。*帰宅後会場からの書き込みを一部編集しました。<m(_)m>

